

平成 24 年第 1 回定例会
スポーツ振興対策調査特別委員会説明資料
目 次

◎所管事項

- 1 第 76 回国民体育大会の開催準備について 1
- 2 競技力の向上について 15

○ 別冊資料

- (別冊 1) 国民体育大会 (第 70 回大会以降用) 開催基準要項 開催基準要項細則
- (別冊 2) 国民体育大会施設基準
- (別冊 3) 新しい国民体育大会を求めて～国体改革 2003～

平成 24 年 6 月 22 日
地域連携部スポーツ推進局

1 第76回国民体育大会の開催準備について

1 現状

(1) 昭和50年「みえ国体」内定までの経緯について

本県では、昭和33年、当時の知事が国民体育大会の招致を表明しましたが、当時は、他県との競合が激しく、以後、昭和38、40、43年の各大会でも日本体育協会の内定を得られませんでした。

このため、県では、昭和42年に県や市町村、県体育協会等の関係団体からなる「第30回国民体育大会招致委員会」を設立し、県議会の決議をいただきながら、会場地市町村の選定など様々な招致活動に取り組んできました。

この結果、昭和44年に、ほぼ全競技の会場地を内定するとともに、県営体育館や陸上競技場の新設を進めるなどにより、昭和46年に昭和50年第30回大会の本県開催が内定されました。

(2) 「みえ国体」が果たした意義について

昭和50年に「たくましくあすをひらこう」をスローガンに「第30回みえ国体」を開催し、簡素・清潔な大会運営や本県選手団の活躍による大会の成功は、県民に自信と誇りを与えました。

とりわけ、スポーツの普及、競技者・指導者の育成、スポーツ施設の整備、スポーツ組織の充実など、スポーツ振興体制の確立とスポーツ文化の形成に総合的に寄与しました。

また、「国体関連道路整備計画」による関連道路の整備などにより、国体開催を契機として、その後の県勢発展のための社会基盤が整備されました。

(3) 今日の国民体育大会を取り巻く状況変化について

国体の開催が一巡し、平成の時代に入るとバブルの崩壊などにより、わが国の経済は長期にわたって停滞し、国や自治体の財政が緊縮化する中で、平成10年に国体開催予定7県から「国体の簡素・効率化に関する要望書」が出されました。これを受け、日本体育協会は、改革・改善を図る取組を進めることとしました。

平成15年、「新しい国民体育大会を求めて ～国体改革2003～」(以下「国体改革2003」という。)が策定され、各季別大会の見直しや大会規模の適正化等の10項目にわたる取組が示されたところです。

また、「国体改革2003」を受けて、「国民体育大会開催基準要項」及び「同細則」(以下、「開催基準要項等」という。)も改訂されました。この「開催基準要項等」では、「大会の競技施設は既存施設の活用に努める」ことなどが規定されています。

2 課題

こうした環境変化に伴い、岐阜、東京、長崎など直近の開催を控えた都県では、それぞれの基本方針の中で、各自固有の目標とともに、いずれも既存施設の活用を謳うなど簡素・効率化を心がけた実施目標も掲げています。

本県においても、県民の皆さんのご理解を得られる大会とするために、今の県の実態や身の丈に合った運営方法等について検討し、県民の皆さんの参画をいただけるものとしていく必要があります。

3 今後の方針

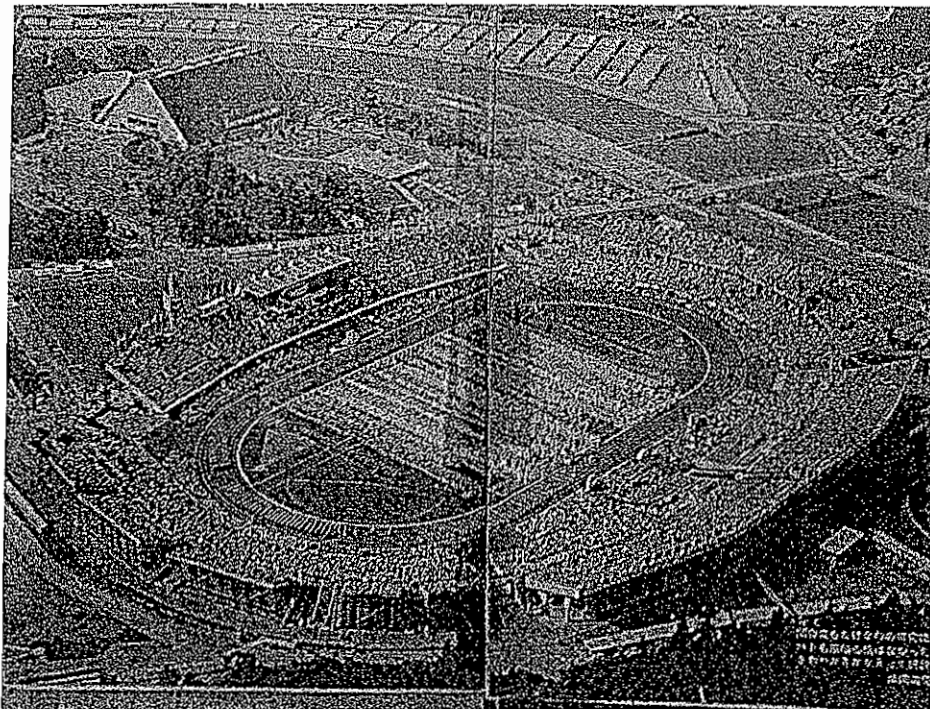
(1) 準備委員会の設立について

県内各界各層の代表者で構成し、大会開催の基本方針などを審議する「第76回国民体育大会三重県準備委員会」（仮称）を設立し、開催準備に取り組みます。

(2) 開催基本方針の策定について

8月31日に設立する「第76回国民体育大会三重県準備委員会」（仮称）において、日本体育協会が策定した「国体改革2003」、「開催基準要項等」や開催予定県の「開催基本方針」等を参考にしながら、「開催基本方針」を策定します。

国民体育大会を取り巻く環境の変化について



	昭和50年開催 みえ国体の実績	平成24年 三重県及び先催県等の状況
1. 県の状況		
(1)人口	1,626,002人(国勢調査)	(三重県)1,840,532人(H24.4) (214,530人増)
(2)市町数	69市町	(三重県)29市町
2. 招致から開催まで		
(1)開催招致	奈良県、滋賀県と三県競願になる中 誘致活動により招致	昭和63年京都府開催より2巡目。 各県での持ち回り開催
(2)準備委員会	約800名(委員会最終年)	(三重県:予定)270名程度
(3)改善事項	<ul style="list-style-type: none"> 前夜祭の廃止 各県本部に対する陣中見舞い廃止 仮設物、競技用具のリース活用 特別招待者へのマンツーマン接伴、 一人1台配車の廃止 制服による女性コンパニオン廃止 	<ul style="list-style-type: none"> (日体協:国体改革2003) 夏季、秋季大会開催の一本化 参加総数15%削減(4,500人) 企業協賛制度の導入 (H20大分県)炬火リレーの廃止 (H22千葉県)行進人数制限
(4)募金・協賛金	実績:4億1,000万円	(H22千葉)1億3,247万円 (H23山口)5億9,590万円
3. 開催状況		
(1)期間	水泳の夏季大会は8月、陸上競技な どの秋季大会は10月に開催	((公財)日本体育協会)(日体協) 本大会として9月中旬から10月中旬 の11日間で開催

(2) 競技数、種別	正式競技：31 (冬季2競技含む) 公開競技：1 (種別) 成年男子・女子、少年男子・女子 (当時は、陸上、サッカー、バレー、 剣道等で教員の部を実施)	(日体協) 正式競技：40 (冬季3競技含む) 特別競技：1 (高校野球) 公開競技：4競技から選択 デモンストレーションスポーツ ：県民が対象の競技
(3) 全国からの選手・監督数	24,852人	(H22 千葉) 40,172人 (H23 山口) 34,201人 ※デモンストレーションスポーツを含む
(4) 観覧者も含めた参加者数	(秋季大会：開会式) 31,423人	(H21 新潟：総合開会式) 40,126人 (参考) 直近開催県の観覧者等を含む参加状況 (H22 千葉) 690,131人 (H23 山口) 676,689人
(5) 競技施設等	開閉会式 (秋季) 県営陸上競技場 <天皇・皇后両陛下御臨席> (夏季) 四日市市水泳競技場 <皇太子・同妃両殿下御臨席> ・13市5町2村62会場のうち、新設21件、改補修14件	(日体協) ※国民体育大会開催基準要項細則 大会の競技施設は既存施設の活用に努め、施設の新設・改修等に当たっては、大会開催後の地域スポーツ振興への有効的な活用を考慮し、必要最小限にとどめるものとする。
(6) 県民意識の醸成	・253の組織、団体による県民運動推進協議会設置 ・12,415名へ県民運動推進員を委嘱 ・各種県民運動展開※1・民泊実施 ・県民音頭による意識の高揚	(岐阜県の例) ・受付、案内、会場美化など県民によるボランティア ・幼稚園などでのミナモダンス演舞、ミナモソングの合唱
(7) 全国障害者スポーツ大会※2	未実施	(厚労省) 平成13年から国体開催後に開催することが規程され、各先催県で実施されている。

※1 主な県民運動：○スポーツを楽しむ運動 (広報、懸垂幕等)、○健康を高める運動 (講演、体力測定等)、○青少年を健全に育てる運動 (パトロール等)、○花づくりと緑化を進める運動 (植樹等)、○笑顔と親切で接する運動 (ワッペン配布、あいさつ先手運動等)、○善意と助け合い運動 (街頭献血、共同募金等) など

※2 全国障害者スポーツ大会

主 催：厚生労働省、(公財) 日本障害者スポーツ協会、開催地主催者

実施競技：陸上競技、水泳、卓球、サウンドテーブルテニス、アーチェリー、フライングディスク、ボウリング、車椅子バスケットボール、知的障害者バスケットボール、グランドソフトボール、聴覚障害者バレーボール、知的障害者バレーボール、精神障害者バレーボール、サッカー、ソフトボール、フットベースボール

国民体育大会のあゆみ

資料2

回数	開催年	開催地	特 色
1	昭和21年	京阪神地方	全国から5,377人の選手が食料持参で参加。スポーツ振興とともに新しい日本の建設に寄与すべく第1歩を踏み出した。
2	昭和22年	石川県	火焰の国体マークが制定され、これを描いた大会旗が掲揚された。また、国体歌「若い力」が高らかに歌われた。この年から記念切手が発行された。
3	昭和23年	福岡県	都道府県対抗の形が確立され、参加人数は20,000人に及び名実ともに国体にふさわしいものになった。天皇杯、皇后杯が創設された。
4	昭和24年	東京都	神宮外苑ラグビー場で夜の開会式。初めて天皇陛下からお言葉を賜る。また、この年は主催者に東京都が特別に加わる。
5	昭和25年	愛知県	炬火が初めて点火され、日本復興の意気を示すように燃え盛り、国体はいよいよ隆盛の兆しを見せた。また、この年から文部省が主催者に加わる。
6	昭和26年	広島県	原爆の傷跡が刻み込まれた地に集まった若者たちは、等しく平和への願いを新たにした。開会式に集団演技が登場し、都道府県旗が掲揚された。
7	昭和27年	福島県 宮城県 山形県	東北3県で開催されたにもかかわらず、大会運営全般を円滑に推進し、人間味あふれる歓迎に接した。祖国復帰の願いを込めて沖縄県が初参加。
8	昭和28年	愛媛県 香川県 徳島県 高知県	全国の地方財政の窮乏のなか「四国は一つ」を合言葉に開催。文化の向上と明朗なる社会の建設等に多大な貢献をした。
9	昭和29年	北海道	地域性を考慮した8月下旬に開催。残暑厳しい中で力いっぱい競技を繰り広げた。第10回大会以降の「国民体育大会開催基準要項」を制定。
10	昭和30年	神奈川県	国体10年目を迎え、底辺の広い国体を目標として、県民運動を展開し、県民総参加の体制を確立。これ以降開催県が主催者に加わる。
11	昭和31年	兵庫県	国体開催が地方財政を圧迫するとの閣議決定がなされた。そのため、この大会は、地方持ち回りの一つのモデルとして注目を集めた。
12	昭和32年	静岡県	初めて炬火リレーが行われ、地元住民の国体参加の意識が高まった。東京都以外では開催県が初めて天皇杯を獲得した。
13	昭和33年	富山県	民泊で真心こもった親切な歓迎ぶりは、選手・役員に深い感銘を与えた。既存施設がフル活用される。秋季大会にブラジル残留邦人が初参加。
14	昭和34年	東京都	伊勢湾台風の被害で三重・愛知・岐阜は出場辞退。オリンピック東京大会の開催が決定され、国民のスポーツ熱が一層高まった。
15	昭和35年	熊本県	オリンピック東京大会を目指し、選手強化が強く叫ばれた年であり、開催地熊本は男女総合で2位を獲得した。国体の開催が都道府県持ち回りとなる。
16	昭和36年	秋田県	スローガン「明るい国体」の県民運動は、大きな成果を挙げた。宿泊は民泊を中心とし、素朴のうちにも真心のこもった親切は好印象を与えた。大会スローガンが初めて登場。

回数	開催年	開催地	特 色
17	昭和37年	岡山県	「歴史をつくる岡山国体」をスローガンに、施設の整備は10年の歳月をかけて行い、岡山県の真価を発揮した立派なものとなった。沖縄県が正式参加。
18	昭和38年	山口県	「友情・奉仕・躍進」をスローガンに、伝統に輝く県民性を発揮。県民運動が県下に普及し、美しい花に囲まれさわやかな印象を与えた。
19	昭和39年	新潟県	東京都以外で初めて天皇杯・皇后杯を独占。オリンピック東京大会の関係で6月に春季大会として開催。新潟地震で夏季大会中止。
20	昭和40年	岐阜県	「明日の力を育てる国体」とした大会テーマが初登場。国体も20年の成人に。オリンピック方式の良さを取り入れ、その華麗さは国体史上まれにみるものであった。
21	昭和41年	大分県	「剛健・友愛・信義」をスローガンに掲げ、あらゆる面に剛健さが出た名実ともに「剛健国体」。大会会長トロフィーが制定された。
22	昭和42年	埼玉県	「精神・健康・協力」をテーマとし、天皇杯・皇后杯の獲得、県民意識の高揚など、数々の成果を挙げた。また、国体史上初の選手村を開設し好評を博した。
23	昭和43年	福井県	明治百年記念「親切国体」を愛称とし、75万福井県民総力結集の成果は、男・女総合成績1位という輝かしい実を結び注目を集めた。
24	昭和44年	長崎県	「創造国体」をテーマとし、「鳩が世界にはばたく躍進の姿」をシンボルマークに、雄飛する国際県長崎の意気を示した。
25	昭和45年	岩手県	「誠実・明朗・躍進」のスローガンを地で行く誠実さと真心は、みちのくの「素朴な人情」として好評を博した。
26	昭和46年	和歌山県	花いっぱい「黒潮国体」。開会式・県民運動・民泊等、創意と工夫により参加者から好評を博した。
27	昭和47年	鹿児島県	「太陽国体」。沖縄が本土復帰し、初めて県旗を掲げて入場。大会旗リレーはこの大会で中止。
28	昭和48年	沖縄県	祖国復帰の感激と発展の願いを込めた「若夏国体」。「強く・明るく・楽しく」をスローガンに開催。21競技の熱戦が展開された。
		千葉県	首都圏で話題になった「若潮国体」。質素着実な「ふだん着国体」を目標に船舶の宿泊利用、選手村の開設等の新しい試み。国体旗を制定。
29	昭和49年	茨城県	テーマを「水と緑のまごころ国体」と名付け広大な自然の中での開・閉会式は「史上空前で絶後」の華麗さを誇る。
30	昭和50年	三重県	「たくましくあすをひらこう」をテーマとし30回の節目と経済不況の中で、創意工夫により国体の原点を目指した。年齢別競技を採用。大会マスコットが初めて登場(県の動物 かもしか)。
31	昭和51年	佐賀県	テーマを「若楠国体」、スローガンに「さわやかに・すこやかに・おおらかに」を掲げ、地方色豊かな国体像を描く。秋季大会参加人数を縮小。
32	昭和52年	青森県	テーマを「あすなる国体」、スローガンに「心ゆたかに力たくましく」を掲げ、冬・夏・秋の全季を通じて同一県で行われた史上初の完全国体。

回数	開催年	開催地	特 色
33	昭和53年	長野県	「やまびこ国体」のテーマのもとで冬・夏・秋の全季を開催し、天皇杯・皇后杯を独占した。未登録競技者にも国体参加の道を開いた。
34	昭和54年	宮崎県	国体の原点を求めた県民総参加の手づくり国体で心のふれあいを広める。台風の来襲で、閉会式が史上初めて屋内体育館で行われた。
35	昭和55年	栃木県	テーマを「栃の葉国体」とし、県民総参加の創意工夫を生かした手づくりによる個性豊かな国体。スローガンは「のびる力、むすぶ心、ひらくあした」。
36	昭和56年	滋賀県	「びわこ国体」をテーマに開催。湖上輸送等の創意工夫により質素な中にも内容豊かな実りある国体として好評を博した。
37	昭和57年	島根県	「このふれあいが未来をひらく」をスローガンとした「くにびき国体」は簡素な中にも心温まる国体でふれあいの輪が全国に広がる。
38	昭和58年	群馬県	健康で文化の香り高い国体を目指した「あかぎ国体」は輝かしい未来に向け、より一層の飛躍を願った。マスコットが初めて登場。
39	昭和59年	奈良県	県民総参加の民泊体制による「わかさ国体」は競技の観客数が史上最高で、人情味あふれるふれあいの輪が広がった。
40	昭和60年	鳥取県	質素な中にも真心のこもった国体を目指した「わかとり国体」は、県内各地で真心のこもったふれあいの輪が広がった。
41	昭和61年	山梨県	「かいじ国体」。史上初めて競技記録収集速報業務の電算化を図るなど、先端技術を導入した「ニューメディア国体」。
42	昭和62年	沖縄県	全国一巡を締めくくる「海邦国体」。復帰15周年を記念する大会として「1人1役万人が主役」を合言葉に県民総参加のもとに開催。
43	昭和63年	京都府	2巡目初回大会「京都国体」。青年2部制の導入、中学生の参加を認めたデモンストレーションとしてのスポーツ行事の実施など、2巡目国体として様々な改革が行われ、国体のあり方を見つめ直す大会となった。
44	平成元年	北海道	「はまなす国体」。完全国体。キャプテンシステムを活用するなど情報化時代にふさわしい大会となった。
45	平成2年	福岡県	「とびうめ国体」。今大会から外国籍大学生の参加が認められ、水泳競技の種目にシンクロナイズドスイミングが加わった。初めて山岳競技で人工登はん会場を使用。
46	平成3年	石川県	「石川国体」。国体史上初の県内全市町村において競技会を開催。今大会から柔道種目に女子が加入、青年2部制種目のうちライフル射撃(CP)が最初に廃止。初めて市街地でカヌー競技(スラローム・ワイルドウォーター)を実施。
47	平成4年	山形県	「べにばな国体」。国体史上5番目の完全国体、県内全市町村が会場となった。県民総参加による身近で、より開かれた国体として開催。
48	平成5年	徳島県 香川県	「出会い 競い そして未来へ」をスローガンに共同開催した東四国国体は、県や行政の枠を越えたボーダレスな時代にふさわしい大会となった。

回数	開催年	開催地	特 色
49	平成6年	愛知県	「わかしゃち国体」。 「いい汗キャッチ!いきいき愛知」をスローガンに開催。交流新時代を迎え、今後の魅力ある地域づくりを進める上で大きなステップとなった。
50	平成7年	福島県	「友よ ほんとうの空に とべ!」をスローガンに開催した完全国体。初めて3季4大会のすべてに集団演技を実施し、大々的に式典を盛り上げ各季大会を合わせ史上最大の参加者を数える大会となった。
51	平成8年	広島県	戦後50年が経過し「いのちいっぱい 咲きんさい!」をスローガンに平和の尊さをアピールする大会として開催。広島らしいもてなしは、友情と連帯の輪を広げ、ホスピタリティーあふれる大会となった。
52	平成9年	大阪府	「なみはや国体」。 「おおさか ふれ愛 夢づくり」をスローガンに全市町村で開催。外国籍社会人の初参加や環境にやさしい取組みをはじめ、38年ぶりの薄暮型開会式、衛星放送による街角放映などに取り組んだ。また、広範なデモンストレーションとしてのスポーツ行事の実施など生涯スポーツ社会づくりへの契機となる大会となった。
53	平成10年	神奈川県	「かながわ・ゆめ国体」。 「おお汗 こ汗」をスローガンに全市町村で開催。簡素で効率的な大会運営に取り組む。全国身体障害者スポーツ大会との協調をめざし、実行委員会の一元化や炬火リレーの共同実施などが行われた。スポーツボランティアのほか、公募制を中心とした式典アトラクションや式典音楽へ県民が参加。
54	平成11年	熊本県	「くまもと未来国体」。 「人、光る。」をスローガンに開催。秋季大会開会式における選手団のスタンド参加や新記録システムによる情報提供など運営の効率化を進めた。
55	平成12年	富山県	「2000年とやま国体」。 「あいの風 夢のせて」をスローガンに冬季(スキー・バイアスロン)、夏季および秋季の各大会を全市町村で開催。インターネットによる情報提供など最新のITを駆使。オフィシャルサポーター(公式協賛企業)制度の創設や全国障害者スポーツ大会の実行委員会事務局組織との一元化など、大会の簡素・効率化の創意と工夫を凝らした。
56	平成13年	宮城県	「新世紀・みやぎ国体」。 「いいね!その汗、その顔」をスローガンに開催。「新世紀・みやぎ国体の花」を育て、花いっぱい運動を各地で展開。各種懇談会、記念品・土産品の廃止や企業協賛金の積極的な受入れなどの簡素・効率化により、国体運営経費の大幅な削減を図った。
57	平成14年	高知県	「よさこい高知国体」。 「いしん前進」をスローガンに四国初の単独開催。秋季大会における宿泊施設の大幅不足から、5競技を夏季大会へ移行、国体初の陸上競技会の先行開催や秋季大会閉会式を屋内で開催。宿泊は2隻のホテルシップや9千人近い選手・監督の民泊等で対応。過剰な競技力強化を廃した結果、39年ぶりに開催県以外が天皇杯を獲得。「身の丈にあった国体」と評された。
58	平成15年	静岡県	「NEW!!わかふじ国体」をテーマに、「“がんばる”が好き」のスローガンのもと県内全市町村で開催。国体初のドーピング検査や15年ぶりに復活したハーフマラソンを実施。「しずおか」らしさの実現への取組みや「簡素・効率化」を目指した。

回数	開催年	開催地	特 色
59	平成16年	埼玉県	「彩の国まごころ国体」。「とどけ この夢 この歓声」のスローガンのもと、「日本一簡素で心のこもった国体」を大会理念に開催。初めて会期の前日に夏季大会開会式を文化ホールで開催。秋季大会開会式当日に新潟県中越地震が発生した。
60	平成17年	岡山県	「晴れの国おかやま国体」。「あなたがキラリ☆」のスローガンのもと、「195万人のスクラム」を目標に、おもてなしの機運が盛り上がり、好評を博した。参加人員削減一部先行実施。秋季大会開会式の選手参集者数を従来の半数に削減し、スピーディーに展開した。
61	平成18年	兵庫県	「のじぎく兵庫国体」。「“ありがとう”心から・ひょうごから」をスローガンに、国体史上初の夏・秋季大会開催一本化を導入。全競技のインターネットによる映像配信、全競技会場等へのAEDの配備など、新しい国体のスタートを切る大会となる。
62	平成19年	秋田県	「秋田わか杉国体」。「君のハートよ位置につけ」をスローガンに、旬の食材を使った郷土料理など「食文化」の発信にも取組み、好評を博した。
63	平成20年	大分県	「チャレンジ！おおいた国体」。「ここから未来へ 新たな一歩」をスローガンに、「大会運営の簡素・効率化」と「大会の充実・活性化」を柱とする「国体改革2003」を完全実施する初めての大会となる。
64	平成21年	新潟県	「トキめき新潟国体」。「トキはなて 君の力を 大空へ」をスローガン、「伝えよう 感謝の気持ちを トキめきを」を合言葉に、災害から復興した新潟県を発信する大会となった。開会式の入場行進人数を各都道府県32名とし、式典時間の短縮や選手の負担軽減を実現した。
65	平成22年	千葉県	テーマ：「ゆめ半島千葉国体」 スローガン：「今 房総の風となり この一瞬に輝きを」
66	平成23年	山口県	テーマ：「おいでませ！山口国体」 スローガン：「君の一生けんめいに会いたい」
67	平成24年	岐阜県	テーマ：「ぎふ清流国体」 スローガン：「輝け はばたけ だれもが主役」
68	平成25年	東京都	テーマ：「スポーツ祭東京2013」 スローガン：「東京に 多摩に 島々に 羽ばたけアスリート」
69	平成26年	長崎県	テーマ：「長崎がんばらんば国体」 スローガン：「君の夢 はばたけ今 ながさきから」
70	平成27年	和歌山県	テーマ：「紀の国わかやま国体」 スローガン：「躍動と歓喜、そして絆」
71	平成28年	岩手県	テーマ： 未定 スローガン： 未定
72	平成29年	愛媛県	テーマ： 未定 スローガン： 未定
73	平成30年	福井県	

【参考文献】

- 「国民体育大会50年のあゆみ」 財団法人日本体育協会
 - 「国民体育大会報告書」 国民体育大会終了各都道府県
- (出典)福井県資料

国民体育大会の開催概要

(日本体育協会「国民体育大会開催基準要項」「同細則」より抜粋)

1 開催の根拠

スポーツ基本法 第26条

2 目的

- (1) 広く国民の間にスポーツを普及する。
- (2) スポーツ精神を高揚して国民の健康増進と体力の向上を図る。
- (3) 地方スポーツの振興と地方文化の発展に寄与する。
- (4) 国民生活を明るく豊かにする。

3 主催

(財)日本体育協会、文部科学省、開催地都道府県

4 会期

本大会：9月中旬～10月中旬の11日間以内

5 実施対象競技 (平成24年3月22日現在)

(1) 本大会

＜正式競技＞ (37競技)	
毎年実施競技 (34競技)	(1)陸上競技 (2)水泳 (3)サッカー (4)テニス (5)ボート (6)ホッケー (7)ボクシング (8)バレーボール (9)体操 (10)バスケットボール (11)レスリング (12)セーリング (13)ウェイトリフティング (14)ハンドボール (15)自転車 (16)ソフトテニス (17)卓球 (18)相撲 (19)馬術 (20)フェンシング (21)柔道 (22)ソフトボール (23)パドミントン (24)弓道 (25)ライフル射撃 (26)剣道 (27)ラグビー (28)山岳 (29)カヌー (30)アーチェリー (31)空手道 (32)クレール射撃 (33)ボウリング (34)ゴルフ
隔年実施競技 (4競技のうち3競技)	(1)軟式野球 (2)銃剣道 (3)なぎなた (4)トライアスロン ※4競技のうち、隔年実施競技として2競技を実施し、さらに残り2競技のうち、開催地選択競技として1競技を実施
＜特別競技＞ (1競技)	
(1競技)	(1)高等学校野球 (硬式および軟式)
＜公開競技＞ (4競技)	
選択実施	(1)ゲートボール (2)グラウンド・ゴルフ (3)パワーリフティング (4)綱引 ※4競技の中から公開競技実施基準に基づき、選択して実施することができる。
＜デモンストレーションスポーツ＞ (県民が対象)	
選択実施	(1)少年サッカー (2)フットサル (3)シーカヤックレース など ※開催県が実施基準に基づき、実施競技を選択

※平成31年度以降の実施競技は、日本体育協会において見直すこととされている。

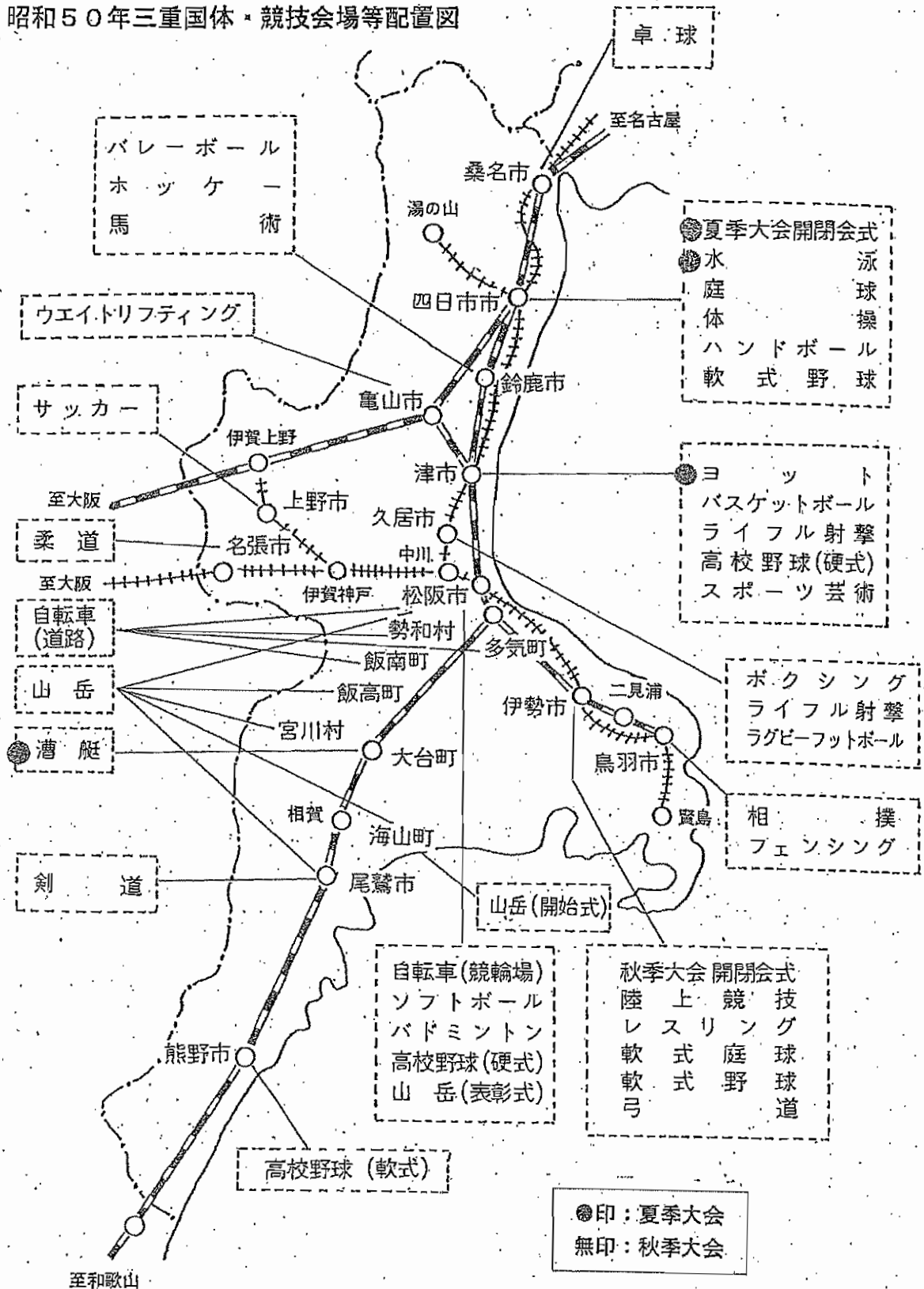
国体開催状況について

回	年度	開催県	順位	回	年度	開催県	順位	回	年度	開催県	順位
1	S21	京都他 4県	—	28	S48	千葉	23	55	H12	富山	44
2	S22	石川	—	29	S49	茨城	14	56	H13	宮城	43
3	S23	福岡	18	30	S50	三重	1	57	H14	高知	45
4	S24	東京他 4県	22	31	S51	佐賀	9	58	H15	静岡	41
5	S25	愛知	17	32	S52	青森	24	59	H16	埼玉	44
6	S26	広島	37	33	S53	長野	21	60	H17	岡山	36
7	S27	福島・宮城 ・山形	19	34	S54	宮崎	30	61	H18	兵庫	35
8	S28	四国4県	25	35	S55	栃木	36	62	H19	秋田	37
9	S29	北海道	24	36	S56	滋賀	30	63	H20	大分	40
10	S30	神奈川	22	37	S57	島根	28	64	H21	新潟	44
11	S31	兵庫	44	38	S58	群馬	47	65	H22	千葉	32
12	S32	静岡	42	39	S59	奈良	44	66	H23	山口	32
13	S33	富山	37	40	S60	鳥取	43	67	H24	岐阜	
14	S34	東京	43	41	S61	山梨	34	68	H25	東京	
15	S35	熊本	39	42	S62	沖縄	41	69	H26	長崎	
16	S36	秋田	37	43	S63	京都	35	70	H27	和歌山	
17	S37	岡山	43	44	H1	北海道	45	71	H28	岩手	
18	S38	山口	40	45	H2	福岡	46	72	H29	愛媛	
19	S39	新潟	42	46	H3	石川	25	73	H30	福井	
20	S40	岐阜	38	47	H4	山形	33	74	H31	茨城	
21	S41	大分	36	48	H5	香川・ 徳島	34	75	H32	鹿児島	
22	S42	埼玉	38	49	H6	愛知	24	76	H33	三重	
23	S43	福井	43	50	H7	福島	40	77	H34		
24	S44	長崎	30	51	H8	広島	35	78	H35		
25	S45	岩手	40	52	H9	大阪	36	79	H36		
26	S46	和歌山	45	53	H10	神奈川	42	80	H37		
27	S47	鹿児島	43	54	H11	熊本	29	81	H38		

※ 順位は天皇杯（男女総合）

※ 大会1巡目（1～42回） 大会2巡目（43回～）

昭和50年三重国体・競技会場等配置図



国民体育大会の果たしてきた意義と役割

国体は、歴史的・文化的に国民スポーツの振興及びスポーツ文化の発展において、主に以下のような貢献をしてきました。

1 わが国のスポーツ振興

都道府県対抗及び全国持ち回り方式により地方スポーツの振興が図られ、わが国のスポーツ振興に大きく貢献するとともに、都道府県のジュニア層をはじめとした各種スポーツの普及及び競技力の向上などに大きな影響を与えてきたこと。

2 スポーツの社会的地位の向上

国体の開催がスポーツ振興法に明記されるなど、わが国のスポーツのシンボリックな祭典として位置づけられ、歴史的・文化的にもスポーツの社会的地位向上に寄与してきたこと。

3 都道府県のスポーツ施設の整備及び競技団体等スポーツ組織・体制の充実

開催都道府県においては、国体開催を契機としてスポーツ施設が整備・充実されるとともに、都道府県のスポーツ振興体制及び競技団体等のスポーツ組織が充実されてきたこと。

4 各種指導者の育成と組織化の促進

都道府県における各種指導者が国体実施競技・種目を中心とした競技者育成に携わることにより、指導者の資質向上と全国的なネットワークづくりなど、組織体制の整備に寄与してきたこと。

5 郷土意識の高揚による地域の活性化

都道府県対抗の大会であり、選手や指導者並びに都道府県民の郷土意識の高揚など、地域アイデンティティーの醸成を通して地域の活性化に寄与してきたこと。

6 開催地におけるスポーツ文化・教育への貢献

開催都道府県における幼児や小・中学生に対するスポーツへの動機づけなどの教育的効果、さらには住民の「するスポーツ」のみならず「みるスポーツ」への興味・関心を喚起してきたこと。

7 開催地のPR 及び経済効果への貢献

国体開催に伴い、開催地域の社会資本の整備（道路及び宿泊施設等）、マスコミ等の報道によるPR 効果、さらには経済効果の発展に寄与してきたこと。

このように国体は、国民スポーツの普及、競技者・指導者の育成、スポーツ施設の整備、スポーツ組織の充実など、スポーツ振興体制の確立とスポーツ文化の形成に総合的に寄与してきました。

（出典：（財）日本体育協会「新しい国民体育大会を求めて～国体改革2003～」）

2 競技力の向上について

1 現状

本県では、国内外で活躍できるトップアスリートを育成し、競技力の向上を図るため、「みえのスポーツ強化推進委員会」を平成 23 年度から設置して、選手の強化、ジュニア選手の発掘・育成、指導者の養成などに取り組んでいます。特に学校への取組においては、教育委員会と情報共有を図るなど、連携して進めています。主な取組は以下のとおりです。

(1) みえスポーツアドバイザーの派遣(新規)

昨年度まで全国高等学校体育連盟テニス部長であり、日本テニス協会から優秀指導者表彰も受けた馬瀬隆彦氏(前四日市工業高校教諭)を「みえスポーツアドバイザー」として任用し、高校等へ派遣し、指導者への助言活動を行っています。(延べ 14 団体訪問: 5 月末現在)

(2) 高校運動部の強化指定による支援(新規) 【参考 1】

全国的な活躍が期待できる高校運動部を強化指定し、合宿や遠征などの強化活動を支援します。(5 月 22 日、6 校 8 部を強化指定)

(3) 中高指導者研修

中学、高校の運動部活動において実績のある指導者などを 30 名指定し、その資質向上を図るために、研修会を開催します。(年間 3 回実施予定、うち県外先進地研修を 1 回実施: 5 月 29 日第 1 回研修会開催)

(4) ジュニア選手の発掘・育成 【参考 2】

ジュニア選手を発掘するため、競技人口の少ない 3 競技(ウエイトリフティング、なぎなた、ヨット)において、平成 23 年度から体験会および練習会を実施しました。昨年度からの参加者に対して引き続き練習会での指導を継続するとともに、今年度も新たなジュニア選手を募集し、発掘に取り組めます。(平成 24 年 7 月～平成 25 年 1 月において実施予定)

(5) その他

上記の小中高校生への取組のほか、成年に対する競技力向上のための取組として、みえのスポーツ強化事業により国体選手の合宿、遠征等の強化活動や競技用具の整備など競技団体の取組を支援しています。

2 課題

これまでの取組により、全国大会における入賞数は年々増加し、平成 23 年の国体においても男女総合成績が一昨年に引き続き 32 位となりました。今後も引き続き、安定した競技力水準の確保とより一層の向上に取り組む必要があります。

また、平成 30 年に開催される全国高等学校総合体育大会や、平成 33 年に

開催される国民体育大会を一定の目標年次としつつ、さらに国体開催以後も一定の成績が獲得できるよう、中・長期的な競技力向上に取り組んでいく必要があります。

さらに、5月30日に開催したスポーツ推進審議会においても、委員から競技力向上のための中長期的な方針を策定する必要があるとの指摘をいただきました。

3 今後の方針

今年度の取組としては、高校運動部強化指定をはじめ、みえスポーツアドバイザーの派遣、指導者研修などにより、高校生の競技力向上を図るとともに、国体選手強化事業などにより各競技団体の強化活動を支援することで、国体において、より上位の成績を目指していきます。

中長期の取組においては、三重県スポーツ推進審議会での意見も踏まえ、教育委員会をはじめとして、(財)三重県体育協会等の関係団体と連携しながら、平成33年第76回国民体育大会の開催に向けて、中・長期的な競技力向上対策の基本方針の策定に取り組み、今年度内にその最終案を取りまとめていきたいと考えています。

【参考】

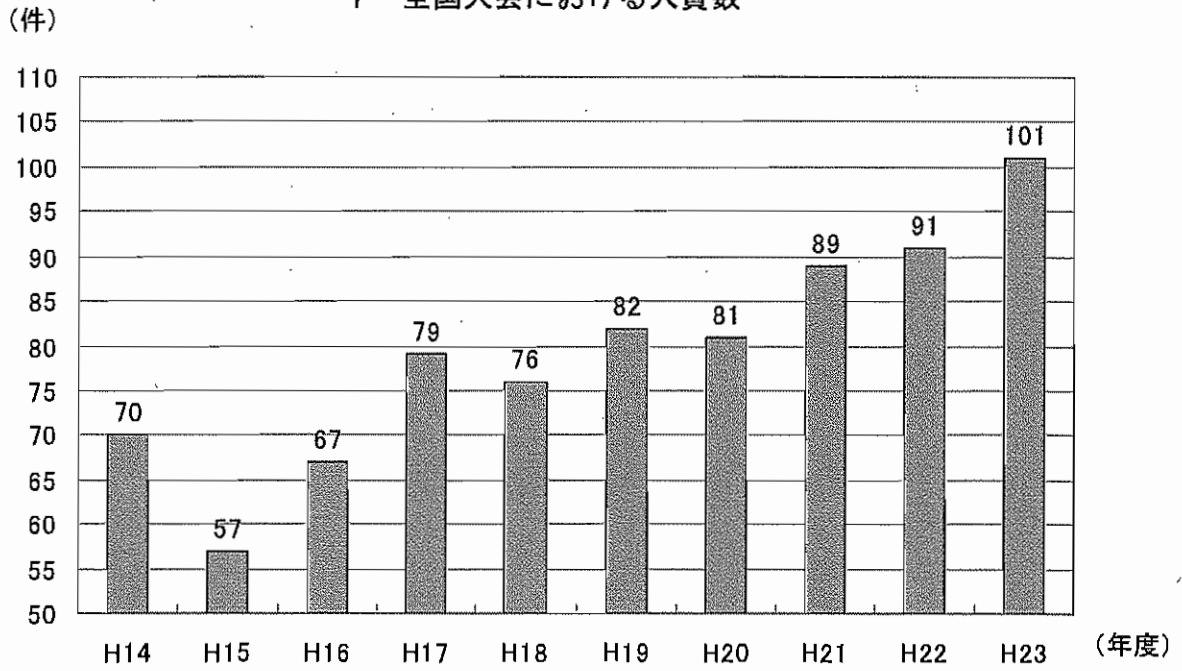
1 高等学校運動部活動の強化指定

学 校 名	運 動 部 名
県立朝明高等学校	自転車競技部（男子）
県立四日市中央工業高等学校	サッカー部（男子）
	水球部（男子）
県立四日市工業高等学校	テニス部（男子）
三重高等学校	ソフトテニス部（男子）
	ソフトテニス部（女子）
県立宇治山田商業高等学校	陸上競技部（女子）
県立鳥羽高等学校	フェンシング部（男子）

2 ジュニア選手の発掘における参加者数（人）（H23年度実績）

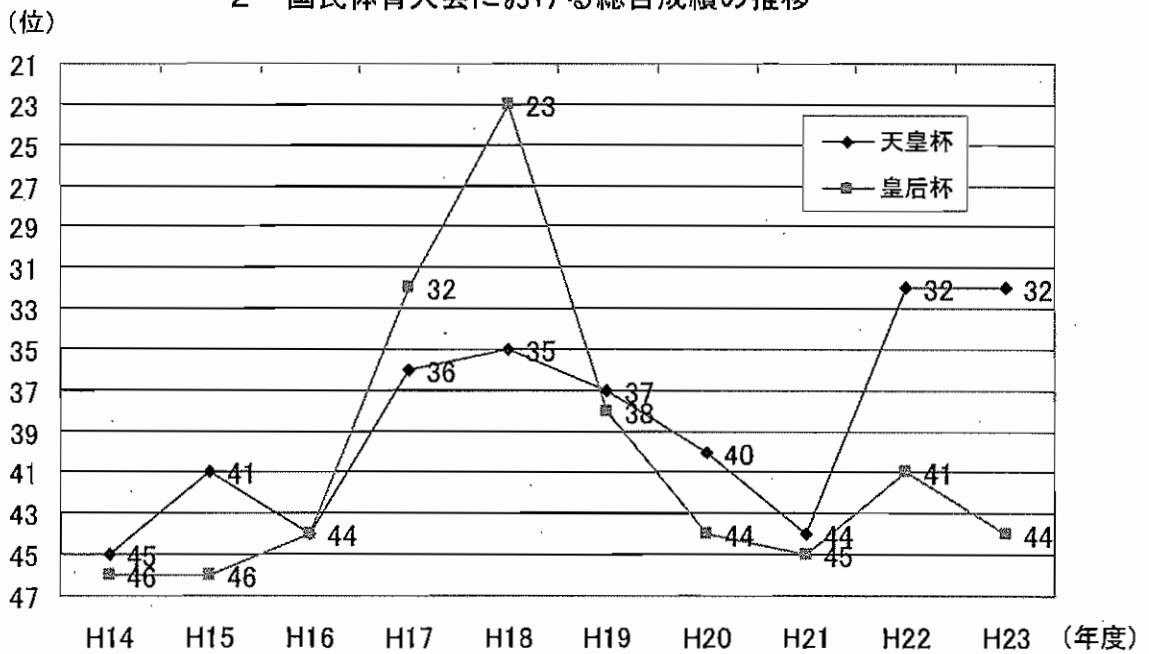
競技名	なぎなた	ウエイト リフティング	ヨット
体験会	20	26	8
育成プログラム	16	8	5
継続希望者	6	7	4

1 全国大会における入賞数



※国民体育大会、全国高等学校総合体育大会、全国中学校体育大会において、ベスト8以上に入った団体・個人の数 (国体準備課調べ)

2 国民体育大会における総合成績の推移



(国体準備課調べ)

天皇杯順位(男女総合成績)の推移

資料2

第62回秋田		
順位	県名	得点合計
1	秋田	2673.5
2	東京	2092.0
3	埼玉	1906.5
4	神奈川	1735.0
5	兵庫	1726.5
6	大阪	1542.5
7	愛知	1455.5
8	千葉	1436.0
9	京都	1416.5
10	北海道	1408.5
11	大分	1300.5
12	福岡	1297.5
13	宮城	1247.5
14	熊本	1148.5
15	静岡	1139.5
16	岡山	1113.0
17	石川	1106.0
18	広島	1093.0
19	新潟	1074.0
20	岐阜	1071.5
21	群馬	1051.5
22	栃木	1032.5
23	長野	1007.0
24	福島	933.0
25	茨城	907.0
26	滋賀	903.5
27	富山	900.0
28	奈良	896.0
29	香川	884.5
30	山梨	882.0
31	佐賀	872.5
32	青森	868.0
33	山形	853.5
34	岩手	827.5
35	長崎	819.5
36	宮崎	819.0
37	三重	795.0
38	福井	793.5
39	山口	789.0
40	沖縄	771.5
41	鹿児島	744.0
42	愛媛	736.5
43	鳥取	731.5
44	島根	683.5
45	和歌山	641.5
46	高知	583.0
47	徳島	565.5

第63回大分		
順位	県名	得点合計
1	大分	2386.5
2	東京	1893.0
3	埼玉	1878.5
4	神奈川	1650.5
5	大阪	1647.5
6	千葉	1569.0
7	兵庫	1507.0
8	愛知	1502.5
9	北海道	1484.5
10	福岡	1452.5
11	京都	1435.5
12	宮城	1230.5
13	広島	1202.0
14	岡山	1195.0
15	長野	1155.5
16	茨城	1148.5
17	岐阜	1144.0
18	新潟	1129.0
19	静岡	1064.5
20	熊本	1038.5
21	佐賀	1010.5
22	群馬	1009.0
23	秋田	991.5
24	香川	989.5
25	石川	975.0
26	山梨	948.5
27	鹿児島	947.0
28	青森	933.0
29	栃木	910.5
30	長崎	895.0
31	福島	858.5
32	富山	824.5
33	奈良	823.5
34	福井	823.0
35	山口	814.5
36	岩手	801.0
37	宮崎	789.0
38	山形	779.5
39	滋賀	770.5
40	三重	744.5
41	和歌山	739.0
42	愛媛	705.0
43	徳島	689.0
44	沖縄	684.0
45	島根	649.0
46	鳥取	626.0
47	高知	581.5

第64回新潟		
順位	県名	得点合計
1	新潟	2426.0
2	東京	1910.0
3	大阪	1767.0
4	埼玉	1739.5
5	神奈川	1643.0
6	千葉	1589.5
7	北海道	1550.5
8	愛知	1530.3
9	京都	1507.0
10	兵庫	1324.5
11	広島	1248.5
12	岡山	1238.0
13	熊本	1210.0
14	大分	1209.0
15	宮城	1201.5
16	岐阜	1194.5
17	群馬	1175.5
18	長野	1147.0
19	福岡	1136.0
20	長崎	1034.3
21	静岡	1029.0
22	石川	1020.5
23	茨城	995.3
24	香川	977.0
25	鹿児島	932.0
26	栃木	908.0
27	山形	898.5
28	山口	990.5
29	佐賀	888.5
30	秋田	868.0
31	山梨	859.0
32	福井	837.0
33	奈良	833.0
34	青森	803.5
35	福島	788.0
36	愛媛	777.0
37	富山	773.0
38	滋賀	758.0
39	岩手	744.5
40	徳島	739.5
41	沖縄	736.5
42	島根	719.5
43	和歌山	705.0
44	三重	691.0
45	高知	663.5
46	宮崎	622.5
47	鳥取	598.5

第65回千葉		
順位	県名	得点合計
1	千葉	2921.5
2	東京	2171.5
3	神奈川	1795.0
4	埼玉	1754.5
5	大阪	1629.5
6	愛知	1578.5
7	京都	1443.0
8	兵庫	1442.0
9	福岡	1437.0
10	北海道	1419.5
11	岐阜	1302.5
12	広島	1266.5
13	山口	1230.5
14	岡山	1164.5
15	長野	1138.5
16	新潟	1097.0
17	静岡	1067.5
18	大分	1039.0
19	宮城	1036.5
20	群馬	1014.0
21	熊本	995.5
22	石川	966.0
23	茨城	954.5
24	香川	947.0
25	富山	943.5
26	山梨	942.0
27	栃木	929.0
28	秋田	881.5
29	青森	880.0
30	滋賀	866.0
31	長崎	834.0
32	三重	816.5
33	岩手	812.5
34	福井	808.5
35	奈良	793.5
36	山形	788.5
37	和歌山	780.5
38	愛媛	770.5
39	鹿児島	769.5
40	佐賀	767.5
41	宮崎	729.5
42	島根	724.0
43	福島	715.5
44	徳島	655.0
45	沖縄	636.5
46	鳥取	629.5
47	高知	511.0

第66回山口		
順位	県名	得点合計
1	山口	2220.5
2	東京	2053.5
3	愛知	1853.33
4	岐阜	1669.0
5	大阪	1633.0
6	神奈川	1628.83
7	千葉	1612.5
8	埼玉	1546.5
9	広島	1460.5
10	北海道	1392.5
11	兵庫	1341.5
12	福岡	1341.5
13	京都	1299.5
14	岡山	1272.0
15	長崎	1055.5
16	山梨	1012.0
17	長野	983.5
18	熊本	972.5
19	秋田	971.0
20	宮城	962.5
21	群馬	961.0
22	静岡	959.0
23	佐賀	957.5
24	大分	953.5
25	愛媛	939.5
26	香川	925.0
27	栃木	920.0
28	宮崎	919.0
29	青森	913.5
30	福井	891.0
31	石川	877.0
32	三重	858.5
33	新潟	843.5
34	滋賀	825.0
35	奈良	815.5
36	茨城	802.0
37	富山	798.83
38	鹿児島	777.5
39	沖縄	760.5
40	福島	727.0
41	岩手	715.0
42	山形	713.0
43	和歌山	670.0
44	鳥取	628.0
45	島根	579.5
46	高知	536.5
47	徳島	525.0